

【教養教育科目】

1	インターフェース科目「食と健康Ⅲ」では、講義内容を理解しやすいようにするために実際に測定を行ったり、身近な例で説明するなどの工夫をした。
2	インターフェース科目にPBL形式を取り入れた。
3	英語については、新しいテキストの開拓が十分にできた。また、本庄キャンパスでの新たな英語授業への対応については、医学部とはレベルを変えるなどの配慮を徹底した。
4	インターフェース科目では可能な限り学生からの発言を誘導し、各症例を用いて医療への興味を抱くように工夫した。
5	教養教育科目として基本教養科目を一部刷新した。
6	キャリアデザインを新カリキュラムで新たに開講した。多様な現場で活躍する諸先輩の講話が学生に好評であった。
7	インターフェース科目では医学部、医学部以外に関わらず抗菌薬の適正使用の必要性を伝え、ナショナルアクションプランに准えて個人ごとにアクションプランを作成させることで能動的に問題解決法を発信させるようにした。
8	「医療人キャリアデザイン」では医・看合同でキャリア教育・多職種連携教育を行っているのみならず本庄の学生の受講者も引き受けており、彼らにも積極的に非医療従事者側からの視点での意見を述べさせている

【専門教育科目・講義・演習】

1	講義プリントの改訂、PCによる動画の採用、スライドと板書の併用、講義の小レポートの提出
2	講義において板書の書き方に工夫をこらしてわかりやすいとの高い評価を得た。
3	教員と学生との双方向性の講義を意識し、適宜、質問を投げかけ自ら考えさせることを心掛けた。
4	本試験の採点結果を寸評の形で学生に公開した。
5	免疫学の講義は、教科書を指定し、しっかり学習できるように指導したほか、スライド等は新規に作成した。配付資料をさらに改善し、見やすいものにした。PBL(U7)の講義に関して、常に最先端の情報を提供すべく、スライドや配付資料の更新を行っている。
6	講義に関しては、配布スライドを見やすく改善した。
7	授業評価アンケートや個別のコメント等を参考にし、講義内容の改善や進み具合の適正化をはかった。
8	前年度の試験結果や学生による授業評価アンケートの結果を基に、講義・資料の内容の見直しや改善を行った。
9	スライド・配布資料の内容を整理し、要点の設け方に工夫を施した。
10	形態学の意義を、顕微鏡技術の進歩との兼ね合いを織り交ぜながら、学生に伝え、臨床的な興味とリンクさせた。
11	学生の修得度合いを考慮しながら、指導を行い、それぞれの位置から目指すべき像を考え、言語化を働きかけた。
12	限られた時間でいかに伝えるかの方法、例えば用いる言葉やプレゼンテーションなどを相互で評価させ、認識を促した。
13	組織学では、講義の補足となるプリントを配布し、重要項目の理解を促した。
14	発生学では、自作の模型を使用して講義を行い、人体形成の3次元・4次元のダイナミクスの理解を促した。また出席調査もかねてリアクションペーパーの提出を学生に提出させ理解度を認識し、次の講義に反映・対応した。
15	肉眼解剖学において、今年度より中間試験と骨学試験の結果は最終評価に算入せず、各々80%以上の得点をもって最終試験の受講資格を与える旨の変更を行なうことで、モチベーションの向上につながった。
16	学生の自己学習能力アップのために、初回の中間試験で不合格となった44名全員に学習法を個別指導した上で、小テスト問題の難易度を上げ、即日採点・即日結果発表することで迅速なフィードバックを心がけた。
17	臨床医を非常勤講師として招聘することで、学生に基礎医学から臨床医学への接続を意識させた。
18	講義では、担当教員が一方的にしゃべるだけでなく、学生への質疑応答を講義中に心がけた。
19	解剖学では学生に対し、適宜、口頭試問をし、理解度を把握しながら指導をしている。
20	生理学講義において、難解な生理学的現象を動画化することにより、イメージ化を図る
21	講義を実施するにあたり、図を多用した授業プリントを作成し、学生が分かりやすいように心掛けた。
22	わかりやすい講義にするため、毎回の講義の目的(SBO)と内容の関連性を明確に示し、丁寧に説明した。
23	学生の興味をひきたすため、講義内容に関連する臨床例を折り込んで、より具体的な理解を得られるようにした。
24	高い講義品質を維持するため、講義アンケートを毎回おこない、その結果を次回の講義に即時にフィードバックした。
25	自己学習を促進するため、講義資料は大きくカラー印刷し、専用のウェブページ(学内限定)でPDFファイルを配布した。

26	学生の理解をふかめるため、学生からの質問には十分な時間を割いて、マンツーマンで丁寧に回答した。
27	本試験および再試験前の質問に対しては、1回に20分以上の時間をとり、質問内容に加えて、本人の弱点と勉強方法を具体的に指導した。
28	薬理学講義において、疾患部位における解剖学的構造および生理学的機能を説明した後に、病態下における機能変化および薬物の薬理作用を解説した。また、各單元ごとに例題を出して学生に考えさせ、薬理学的思考のトレーニングを行った。
29	各單元終了時に中間試験を3回おこなった。これらの試験では暗記項目はCBT試験に準じた必要最小限の項目のみにして、薬理学的思考力およびデータ分析力を養うための問題を出題した。
30	薬理学の講義では、各授業項目の要点をまとめ学生の理解が深まるように講義展開を工夫した。
31	毎回講義内容をまとめたプリント（シラバス）を準備し、学生に配布した。
32	講義内容をさらに分かりやすく説明するために、スライドを作成し講義を行った。
33	講義・実習では、分かりやすい説明を心がけ、学生の質疑等に対し、丁寧に対応、指導した。
34	講義・実習では、マクロ像や病理組織像を多用し分かりやすい説明を心がけた。学生の質疑等に対しては、丁寧に対応、指導した。
35	講義や実習では、シラバスを配布し、理解の助けを改善した。また、学生の質問には、時間外でも積極的に対応した。
36	医学科学生への講義では、病理学の用語、定義、概念を理解できるように、講義内容を吟味し、実際の講義を行った。
37	看護科学生への講義では、図を多用して病理学の理解を助けた。
38	看護科の講義では、病理学の概念、疾患の定義を日常診療や看護と関連づけ、興味を持ちやすいように内容に配慮した。
39	実際の写真や図を多く用い、印象に残るようなスライド作製を行った。
40	医学科の講義資料を改善したところ、学生の総合評価が4.5に上がり、取組みが高く評価された。
41	看護学科の講義資料を改善した
42	分子細胞生物学、微生物学 講義用プリント及びスライドを学生の意見を参考に一部作り変えた。
43	講義内容および配布資料は、すべて毎年アップデートしている。
44	社会医学の講義期間中の昼休みの時間を利用して医師会と共同でキャリア教育を実施した。
45	保健統計の資料は毎年新しいものに更新している。公衆衛生分野の総括講義の問題作成と取り纏め、解説を行った。
46	看護科の疫学ⅡのグループワークにWeb調査を取り入れることで、研究計画に加え、調査の実施分析、発表ができるように工夫した。
47	講義のねらいや教えたことなど、教育の理念を解説し、学生の興味を促した
48	講義では学生の興味を引き出すよう考え、板書の見易さに配慮したほか画像提示も行い、わかりやすい説明を心がけた。
49	臨床医を目指す学生が多い中、法医学に興味をもたせるよう、実際に起きた事例もまじえて講義した。
50	画像教材で、大規模災害や虐待事例について講義を行った。
51	学生用講義プリントを充実させ、自己学習を行い自分で理解し発展学習ができるように工夫した。
52	膠原病の画像診断・エコーのシラバスを改訂整備しなおした。
53	講義スライドは新しい知見を盛り込み毎年マイナー改定を行っている。
54	医学に直接触れたことがない学生のために写真や動画などで分かりやすく工夫した。
55	講義では実際の症例提示を交えて、病歴、症状や検査所見から診断に結び付ける考え方を身につけられるよう心がけた。
56	写真スライドや動画を用いた解説を行った。
57	学生の理解が不十分な点を中心に講義を行った。
58	自己紹介でのアイスブレーキング、趣味や好きなものなど得意な分野の話をも膨らませてもらう
59	実際の国家試験の内容や学内試験出題者の意図を説明する
60	3つの学部講義に関しては講義用のPowerPointファイル、配布資料を作成し、最新の国家試験の内容を盛り込んだり、ビデオ映像を取り込んだり、学生に興味を持ってもらうべく工夫を行った。
61	講義のプリントをアップデートした。
62	能動的な学習
63	プリント併用とともに講義のビジュアル化に務め、PBL講義の学生の評価が最も高い講義の1つとなった。
64	シラバスの工夫、講義スライドにイラストや写真を多く取り入れ視覚的な学習を増やすようにした。
65	系統講義においては、心エコーの各疾患毎の実際の動画を引用するなどして、学生の興味・理解度の向上に努めた。
66	肺循環の講義において、これまでの肺塞栓症主体のものから、より実臨床に則した肺高血圧症全般についての講義に変更した。
67	講義ではただ聴講するだけに終わらないよう、重要箇所を強調するよう配慮した。
68	病棟での講義は、少人数の良さを生かして、その場で理解し習得できるよう配慮した。
69	佐賀で働く医師の実情を伝え、佐賀に残る医師を増やすことを目的として、キャリアプランに関するレクチャーを行った。

70	講義では、単なる疾患の羅列・説明といったなじみのない疾患では理解困難な状況に陥らぬよう、具体例を挙げ、また実際の診療現場で重要となる事項を中心に説明し、理解の一助になるよう取り組んだ。
71	講義・シラバスに簡単な設問を用意し、単調な進行にならないよう取り組んだ。
72	シラバスや内容は毎年改訂に心がけている。
73	理解しやすいように画像や動画を多く取り入れて授業を行った。
74	講義シラバスの配布
75	講義内容のまとめを授業先後にチェック方式で確認
76	教科書や資料の使い方指導等
77	講義は一限目に具体的な到達目標を説明し、講義を行うことで学生に学習目標を明確にした。さらに講義中に症例を呈示し知識を繋がるように説明した。また最先端のエビデンスに基づいた診断学、治療学についても説明した。
78	肝疾患の症候学、肝臓について臨床に重点を置いた講義を心掛けた。
79	講義では分かりやすいスライド作成を心掛けた。
80	レクチャーは4年生までの授業では教えるに、身体所見や診察方法を取り入れた内容としている。
81	特に肝疾患について佐賀大学医学部附属病院が佐賀県の肝疾患診療連携拠点病院に指定されていることや以前の肝疾患医療支援学講座の取り組み等、臨床医学と公衆衛生・産業医学との連携など座学の授業の垣根を越えた内容を講義している。
82	医療経験が少ない看護科一年生の講義では家族や友人の病期のエピソードから導入し、実際の臨床現場を想起させ、専門性のある講義へつなげる。
83	講義スライドを改訂した。
84	医療の現場で働く上での常識やコミュニケーションスキルを教えた
85	授業内容で用いるスライドに、写真やシエマなどの画像をたくさん取り入れることにより、わかりやすく学生の理解を含める方針とした。
86	学習意欲を高めるため、講義内容で扱う疾患をもつ患者が、現実的にどういうことで悩んでいるか、またその治療を行うにあたり、本人や家族の環境にどういう変化が出るかなど具体例を説明した。
87	ユニット7講義では、臨床写真や病理組織像を多数用いて視覚的にも学びが深まるように工夫した。
88	講義において皮膚科特有の手術器具や手術のポイントに重点を置き解説した。
89	シラバスをわかりやすく改善した
90	講義では、最新の医学知識にアップデートし、また、簡潔にまとめること、重要な点をハイライトすることによって、より要点の理解しやすい講義となるように工夫した。
91	より学生が興味をひくように、講義内容を写真や画像が多くなるように工夫した。
92	新しい知見や最近の話題を入れる
93	図やビデオを提示して視覚的にもわかりやすくする
94	一人一人に発言を求めディスカッションの活発化に努めた。
95	先天性心疾患シラバス 図の追加、変更
96	国家試験に出題されることが想定される内容を重点的に指導。
97	学生の学ぶ意識を聞きだし、適切な情報提供を行う。
98	講義において例年の内容を踏襲しつつ、医師国家試験の過去問題とその解説などを加え、学習するうえでの方向性を示すことができるように心掛けた。
99	医学科3年生講義の増加に伴い、スライドの作成、校正を行った。
100	医学科3年生、4年生の研究室配属となった学生のカリキュラムを組み実行した。
101	学生にも身近に感じてもらえるように具体例などを提示するように努めた。
102	ビデオ供覧
103	総合ディスカッション
104	講義において動画や写真を多く用いて、視覚的にわかりやすいように工夫した。
105	講義・実習指導においては、基本的に実臨床に基づくデータを供覧しながら興味を持たせる様に工夫した。
106	顕微鏡下の切離、縫合操作を基本としているが、人工血管等さまざまな材料を用い、実際の手術に近い環境を実現しより興味をもって取り組めるように工夫している。
107	スライドのシラバスを用意する
108	質問をしながら考えさせる
109	臨床の症例から生理、解剖学など基礎の分野も考えさせるように努める
110	英語論文の抄読会および解説を行い、論理的な思考トレーニングを試みている
111	常に病態生理を考えるよう指導している
112	講義においては、泌尿器診療になじみがない者も興味をもてるように、適宜具体的症例提示やイラストを用いた。
113	研究室配属プログラムでは、基礎研究の楽しさ、面白さを伝えるよう実験を一緒に行い、結果について学生と議論した。
114	予定表を作成し、学生がディスオリエンテーションにならないよう心掛けた
115	講義内容・シラバスの見直し・刷新
116	講義においてはPowerPointを用いて教材作成をしているが、授業終了後には作成した講義内容すべてを公開
117	講義や実習の評価を適宜学生から聴取し、その結果を反映した内容にするように心がけている。

118	講義内容向上のため、知識習得に日々努めている。
119	講義では、実際の精神医療の現場だけでなく他の領域の医療現場や個々の日常生活でも役立つ内容になるように配慮して、精神療法や心理検査の具体的な方法論や技術だけでなく、ものの見方を伝えるように工夫した。
120	講義では、説明内容がスムーズにいくように、導入部分を分かり易く構成し、資料の作成、配布を行い、スライドを併用した
121	講義では学生が興味を持てるように実際の症例や画像、動画を多く取り入れるよう心がけた。
122	少人数講義では双方向性で質問しながら講義を進めるよう心がけた。
123	医学部ユニット10講義では、最近注目されている「反転授業」の試みとして、資料を予め学生に配布した上で、授業中学生への質問を行った。
124	看護学科講義では、ヴィジュアル効果で学生の理解を深めるよう、講義スライドのみならず配布資料もカラーのものを作成して配布した。
125	ユニット5については、内容が多かったため、前年度よりもゆっくりと話をするようにした。
126	ユニット10については、発生理学内容を詳細に説明した。
127	最新のエビデンスに基づき、シラバスのアップデートを行った。
128	講義はパワーポイントスライドを用いて視覚的にも理解しやすい様に心がけた
129	医学科4年次UNIT10のPBLコマ数減、講義数増によって、講義時間を1コマ増加していただいたおかげで、ゆっくりと説明することが可能になり、より丁寧な講義になるように心掛け、国家試験での例題を途中で織り交ぜながら講義した。
130	解剖学的な位置関係などをわかりやすいように動画、写真、イラストなどを利用した
131	実際の患者さんの実例を示し、患者さんの協力を得ながら、教科書の深い理解ができるように留意した。
132	臨床解剖学、疾患概念に沿った手術法の説明
133	病態、原理から考える疾患概念、ガイドライン
134	学生に質問を行い、知識が定着するように努めた
135	以前の授業内容の確認を行うことで理解度を確認し、重要項目は振り返りを行った
136	学生の興味のある診療科と産婦人科学という観点で疾患を見つめるよう努めた
137	コアカリおよび国家試験出題基準に準じた講義の実施と医局員への指示
138	術後症例提示の際に、特に重要な所見についてハイライトを行った。
139	講義では視神経疾患を担当した。動画を用いて分かりやすく解説した。
140	講義は一般的な内容も取り込み、学生にもイメージしやすい内容を重視した。
141	国家試験の過去問を調査し国家試験合格を意識した内容を講義に取り入れた。
142	PowerPointを用いた臨床実習の学習資料内容の充実を行った。
143	講義は医師国家試験の出題範囲に沿って、実際の症例写真を提示しながら授業を行った。臨床実習においては、
144	臨床入門スキルラボでは、実際の診療でも重要と考えられる部分を中心に指導できた。
145	国家試験出題基準に照らして講義内容を修正した
146	講義はできるだけ学生に興味を引いてもらうために、文字を極力減らして、インパクトのある症例写真を中心にスライドを作成した。またいかに医科と歯科（特に口腔外科疾患）が密接に関わっているのかを強調して講義を行った。
147	選択コースの学生に対しては、できるだけ座学だけでなく、模型実習など経験型の学習時間を多くするようにプログラムした。
148	1人最低1つの項目に対して発言を行うように指導し、自発的な発言がない学生も討論に参加させることができた
149	講義スライドを資料配布し、学習効果を高めた。
150	わかりやすいようにシラバスに図をとり入れ、講義の際に画像を提示するようにしている
151	学生が周術期管理においてどのような疑問点を持っているかを抽出し、日々の症例でディスカッションを行う。
152	講義やPBLでは、その講義内容に則した自分自身の体験（麻酔やこどものことなど）などを織り交ぜながら、なるべく興味を持ってもらえるように授業を行っていった。
153	講義ではTAVIについてわかりやすく理解してもらうため動画を用いて説明を行った。
154	実際の症例を取り入れ質問を織り交ぜつつ実臨床に則した講義を心がけた
155	講義においては、前年度までのスライドをさらに改良し、図を多く用いたスライドを作成した。
156	授業評価に基づき、興味がわくよう講義用スライド内容の見直しを行った。
157	担当した講義では、知識のみならず、実臨床例の紹介を多く行い、写真を多用した。
158	放射線科としてできるだけ多くの画像を紹介しようと講義のスライドに盛り込んだ
159	講義評価に基づき、わかりやすいよう講義用スライド内容の見直しを行った
160	講義においては、解剖学的事項の復習や正常像の理解を深めることに重点を置くため、CT画像を用いた3D立体画像を使ったわかりやすい説明をするよう工夫した。
161	実際の画像を読影して所見を取ってみる試みを3年生の授業に導入し、継続中。
162	問題解決型の講義・実習を加える
163	実臨床に基づいた症例提示、経験談を中心に教科書的な知識と現在のガイドラインに照らし合わせ講義・説明を行った。

164	外傷初期診療をガイドラインと実臨床に基づいて指導し、研修医になったときに役立てられるように教育した。
165	医学科4年次のEMPの本試には、医師国家試験の英語問題を出題している
166	より操作が簡易な統計解析ソフトJMPを導入して教育を行った。
167	毎時間小テストを行って理解度確認を行った
168	物理学(講義)で昨年度取り入れたActive Learning手法「LTD話し合い学習法」が100人超の大人数教育には、そのまま適用できないと分かったので、そのエッセンスはできるだけ取り入れて、大人数にも適用可能な形を考えて実行した。
169	講義や実習では、教科書以外にも講義資料や新たな機器を準備した。講義の流れを示して、実際の福祉機器を使って説明したり、動画での説明方法を行った。
170	学生の講義中の発言を促すため、スライドに対する発言を求め、プレゼンの練習を兼ねて講義を行った
171	長年の米国での研究・教育経験を活かし、症例や法律(HIPAAなど)、最近の研究事例を活発に議論する機会を講義中に設け、学生の学習意欲・考える力を高めるよう工夫を行った。
172	医療倫理・プロフェッショナリズムの講義では、実際の事件や訴訟、症例を挙げ、どの時点のエラーが訴訟や患者さんの死に繋がったのか熟考・発言させるようにした。
173	画像やビデオなどメディアを用いて、より実体験に近い講義になるよう工夫した
174	PhaseⅢUnit13臨床入門では、小グループに分けて演習・実習が充実するようにした。
175	看護学科 人体の構造と機能(解剖学・生理学)では、学生に配布する講義資料の改訂を行った。また、自己学習の補助とするべく、国家試験過去問集を配布した。本試験前に希望者を対象に補講を行い高評を得た。
176	医学科 組織学 分子細胞生物学Ⅱでは、講義およびホームページ掲載資料の改訂を行った。
177	組織学および組織学実習では、学生に対して基礎に戻った説明を、ときにはマンツーマンでおこなった。これにより、学生の理解度も高まり、学生による授業評価で高い評価を得た。
178	講義内容の見直しを行い、看護実践能力の育成に繋がるよう、フィードバックを充実させた。
179	演習についても、より教員の指導が充実するように演習方法を見直した。また、演習時の必要物品についても拡充を図り、学生の評価も良好で、看護実践能力の向上に役立った。
180	演習のレポートは、評価BCの者はAレベルに至るまで繰り返し指導し、学生の能力の向上に繋げた。
181	ルーブリック評価を導入するとともにアクティブラーニングを積極的に取り入れた。
182	担当科目の教科主任として、講座内教員の調整や提出物の管理、評価資料作成および評価を行った。担当した講義・演習では、主体的に学習に取り組むように教育方法の工夫をした。
183	講義科目において、前年度の学生授業評価、出席票に書かれた感想、および授業メモを振り返り、学生の理解が深まるように説明内容や教材を工夫した。
184	複数教員が関わる演習科目において、事前打ち合わせ、技術のデモンストレーション練習を行い、教育内容の教員間の統一を図った。
185	講義においては、昨年度の課題を踏まえ講義内容を追加、修正を行い、新たなる参考書を追加して講義内容の充実を図った。また、昨年度の演習の課題も踏まえて、演習につながる講義を模索し講義を組み立てた。
186	演習においては、学生が学習しやすいよう手順書の修正を行い、講義の内容が連動できるよう手順書のなかに認知のポイントを織り込んだ。また、学生には、根拠について発問を行い学びを促した。
187	技術チェックでは、技術の改善案を明らかにし、学生が自らの課題が理解できるよう指導を行った。また必要時は、レポートに追加資料を添えて指導を行った。
188	1年生への概念や理論の講義では学生のレディネスに応じ、身近な生活経験のなかの例を用い理解しやすいよう工夫した。2年生への看護技術の講義においては、既存研究の結果や根拠を強調し、アセスメントに基づいた看護援助の選択・ケアの提供の必要性を伝えた。
189	演習では、学生の役割や課題を明確にし主体性が育つよう関わった。看護技術の演習では、学生の意見を引き出し課題や改善のための方策を考えられるよう意図的質問や意見交換の場を作り、課題対応能力が身につくよう心掛けた。
190	講義については、重要なポイントをまとめた資料を印刷物として毎回学生に配布した。精神看護をイメージできるようにスライドやDVDなどを活用し視覚的に学習効果を向上させることに努めた。テキストのみの内容に偏らないように適宜、教材を活用し、また個々の学生が考える力を伸ばしていけるように、事例を用いて看護過程の展開に取り組み、より現実的にケアの場面をイメージできるように努めた。可能な限りアクティブ・ラーニングを取り入れるよう試みている。
191	精神看護学各論Ⅰでは、3年次後期の精神看護学実習で受け持ちやすいケースや疾患(統合失調症)を考慮して事例を作成し、臨地実習で実際に使用する記録用紙で事例展開をした。
192	知識の定着化を図るため、各授業項目が終了した後に関連問題を解かせ発表させている。その際に、看護職としての対応/考え方/法的根拠等も併せて教授している。
193	また、授業中に学生自身に考えさせ発言させる時間を設けアクティブラーニングを意識して行っている。学生の授業評価コメント等から、この授業方法は好評をえていると考える。
194	講義においては、看護理論やモデルの使用を授業や演習に取り入れ、看護学の理解を深めることができるようにした。
195	また、演習においてはこれまでの教員の経験を踏まえ、具体的な事例を用意し、実習とのギャップがないように配慮した。
196	授業アンケートに基づき、継続して学生のニーズに対応した講義内容を導入した。

197	臨床心理学の専門性を活かし、看護学や医学とは異なる視点からの臨床援助と教育を心がけた（例えば、緩和ケア医療に従事する専門職のメンタルヘルスや、患者－医療者関係におけるカウンセリング・マインドなど）。
198	アクティブラーニングを用いた教授法を講義の中に取り入れた。
199	事前課題、グループワーク、演習、講義前後の小テストによるアクティブラーニングを促した。
200	演習と臨地実習時に使用するレポート書式を統一し、学生が学びやすい工夫を行った。
201	2年次に対する講義においては、3年次の臨床実習で活用できる知識の教授に努め、実際に臨床で使用している物品を提示したり、実際の患者をイメージ化しやすいよう画像等の教材を活用した。
202	グループワークにおいては、学生同士のディスカッションが深まるよう関わり、学習目標の達成にむけて学生らが主体的に課題に取り組めるようファシリテートした。
203	各講義や演習では、学生の思考の時間をつくるとともに、発表を通して成果を評価できるようにした。
204	老年看護援助論において、看護過程の指導方法を見直し、グループワークを充実させ、学生の満足度が高かった。
205	老年看護援助論のレポート評価にルーブリック評価を新たに取り入れたことで、学生の学習が深まった。
206	成人・老年看護学演習において、後期の実習の内容にリンクした学習内容を構築したことで、学生の満足度が高かった。
207	看護倫理講義に事例検討演習の事例を昨年度の教育効果を踏まえて検討し、より学生のレディネスに応じて倫理的課題の解決方法を習得できるようにした。グループ討議の効率やディスカッションの深まりを考えPCを活用し演習環境を工夫した。
208	老年看護学援助論では、昨年度から取り入れた高齢者理解のためのロールプレイ・コミュニケーション演習の事例検討・演習方法の工夫を行うことで、より多面的に高齢者理解が深まるように工夫した。
209	講義、事例を用いた演習では、グループワークを通して学びが深められるよう指導を行った。
210	助産コースでは、旧カリキュラムと新カリキュラムが併行したため、合同授業を行うなど、効率化を行った。
211	助産コースのカリキュラム移行に伴い、可能は講義については合同で行い、3年次4年次ともに学びが深まった。
212	分娩介助技術習得については、動画を導入することで自分の技術をより深く振り返り改善することができた。
213	講義では企画書を作成し、教科主任に確認した。
214	演習においてアクティブ・ラーニングのジグソー学習法を導入し、講義を工夫している。
215	健康な子どもの発達を理解した上での病棟実習を行ったことで、同じ発達段階であった場合にはとても理解できたという学生からの意見も聞かれている。発達段階が異なった場合にも発達の経緯について理解をしやすくなっていると評価する。
216	演習においては、アクティブラーニングを取り入れた演習を実施した。演習ではグループワークを通じて、共に教え合うことで、学びが深まったとの感想も聞かれた。
217	講義は、病休者の作成したシラバスに不合理がある箇所は、合理的に、また学生の理解のしやすいように改善した。
218	講義の構成を工夫し、学生が興味を持てるように組み替えた。ペーパー・シナリオ・シュミレーションなどを取り入れた。
219	公衆衛生看護学の一般的に教授しておくことの内容や最近の知見について、授業で取り入れた。学生から授業がこれまでと比べて丁寧で興味深かったと評価を受けた。
220	講義ではスライドをシラバスにして配った。実際の症例の画像を用いて、理解しやすいように提示した。
221	講義においては、専門用語と平易な言葉を並行して使用することで、より理解が深まるよう心がけた。
222	講義スライドを学生のレベルを検討しながら、内容の改善をおこなった。
223	学生に対する指導では、学生たちの疑問に根気強く対応した。
224	学生たちの疑問を踏まえ、疑問を解決できるような講義内容に修正をおこなった。
225	麻酔では、術前からの患者リスクの指導、術中は患者管理に加え基礎医学領域の知識が臨床にどのように活かされているか、医学生として学習、理解し、国家試験でも問われることを説明している。
226	救急では、さまざまな臨床領域の問題が複合して生じていることも多く、それを診断から集中治療に一連の流れとなるよう説明している。
227	臨床を意識した授業を行った。
228	スライドを簡略化することで学生により要点が伝わりやすくなるよう心掛けた
229	例題を増やした
230	本年度はインタラクティブな講義を実現するため、スマートフォンによる投稿システムを利用した講義を行った。
231	医療プロフェッショナルリズム、CBLにも応用し、効率的な講義を展開した。
232	クリニカルエクスポージャーではコミュニケーションスキルの重要性について説明を行い、面接後にも振り返りを行うことで各自何が問題であったかなどについて、学生と討論を行った。
233	学生講義ではPowerPointでのスライドで写真を多用し、印象に残る授業を心掛けた。

234	学生講義においてインターネットを介した双方向性アンケートを可能にするサービス (mentimeter) を利用し、授業の工夫を行った
235	臨床実習、PBLでは、学生自身による考察を深められるよう、粘り強く対応した。
236	ユニット11の講義に関しては、重要なポイントを強調しつつ、分かりやすい内容になるように努めた。
237	レポート課題や、対象症例の見直しを行い、PBLの導入も行った。
238	学生講義では講義スライドやプリントを用いながら理解しやすいように説明に工夫した。
239	リハビリテーション医療の幅広い領域と内容について理解や興味を深めてもらうために、実技を盛り込み指導を行った。
240	臨床事例を提示し、具体的な感染症疾患として印象に残るよう心掛けている。実臨床に準じた問題解決・感染症診断のアプローチを提示している。
241	臨床入門においては、最も重要視すべき手指衛生を中心に習熟を促す内容へ刷新を行っている。
242	医療安全の講義を今年度より「WHO患者安全教育カリキュラムガイド多職種版」に沿った内容に変更した。
243	講義内容を基礎とした実際の問題解決力になる知識の習得のためにワールドカフェ方式、ワークショップなどによるディスカッションなどを用いた講義、実習内容に工夫した(医療入門Ⅱ)
244	医学科1年生から6年生までの教育に際し、卒前・卒後教育(臨床研修、専門医研修)の切れ目ないつながりを意識し、常に、それらに関連付けて、学習者のモチベーションを高くするように心がけた。
245	授業では、できるだけ能動的になるように、演習、実習を多く取り入れる工夫を行った。
246	Audience response System(ARS)を用いた心電図教育法を取り入れるなど指導法の工夫を取り入れている
247	退屈させない工夫として、演習を用いた参加型の講義を行った
248	退屈させない工夫として、実際の臨床薬剤の調剤などを行う参加型の講義を行った
249	学生が知りたいこと、興味がわくところ、国家試験でもよく出題される重要などところ、最新の知見に関することなどを中心に授業や講義、指導を行うことを心掛けた。
250	超音波検査の見学時に実際の画像を使用し見方を説明した

【専門教育科目・実習】

1	学生が困ることなく実験を終えるように、巡回を頻繁に行った。
2	実習において大学院生も含めて配置してきめ細かい指導を行い高い評価を得た。
3	実習後に行ったアンケート結果を活用し、シラバスの改良を行った。
4	実習レポートの書き方について、細やかな指導を行った。
5	生化学実習レポートにおいて過去のレポートの写しを提出した場合に判別できるように実習を工夫し、写しを提出した学生には再提出と指導を行った。
6	実習では、新規に設定したテーマをさらに改良し、安定した結果が出るように工夫した。また、最新の分子生物学的手法やゲノム情報に関する内容を盛り込み学生の興味を引くようにした。
7	実習に関しては、説明スライドに動画を増やし、視覚的理解の改善を行った。
8	自身の最新論文で確立した技術を学生に指導することで、最先端で技術であることを強調、学生に興味を持って貰うことが出来た。
9	組織学実習では、1年次の成績を参考にし、バランスの良い実習班をつくり班単位での自己学習を推進させた。毎回のスケッチをレポートとして、後日の提出とした。それにより学生自身による十分な自己学習の時間を与えて、理解を促した。
10	組織学実習において、系統解剖の知識、臨床症例の話題と関連付けた解説を行い学生の興味を引くようにした。
11	組織学実習において、スケッチの提出レポートには問題点を示したコメントを付記してフィードバックした。
12	神経解剖実習において、脳神経系立体構造の理解の一助として、関連する書籍の図譜を複数用意し適宜解説に使用した。
13	神経解剖実習において、2年次の神経解剖学講義・組織学実習で得た知識と関連付けた解説を行い理解が深まるようにした。
14	解剖実習・骨学実習において、希望する学生に対して解剖手技についてのレクチャーを行った。
15	19時頃まで学生の実習指導を行っている。
16	動物性機能実習において一部の難解な実験を削減し、よりわかりやすい内容に変更した。
17	わかりやすい実習を、一人で行えるよう、実習内容と実習器材に工夫を凝らした。
18	高い実習品質を維持するため、講義アンケートを毎回おこない、その結果を即時にフィードバックした。
19	実習内容の理解を徹底するため、実習の全体ディスカッションを行い、学生に発表させた。
20	自己学習を促進するため、実習書やディスカッション資料はカラー印刷し、専用のウェブページ(学内限定)でPDFファイルを配布した。
21	学生の理解をふかめるため、学生からの質問には十分な時間を割いて、可能な限り丁寧に回答した。
22	薬理学実習において、自律神経系刺激による消化管運動の変化を観察させた。様々な阻害薬の投与によって生じる消化管運動の変化をを学生自らが考察するよう指導し、学生の論理的思考力の育成をおこなった。

23	実習では、薬の作用について理解が深まるように指導した
24	病理学実習で無駄のない時間配分にして、学習の効率化を図った。
25	選択コースでは病理解剖全般を体験させ、標本作製も行うことができた。
26	実習も時間外の実習を行った。
27	実習と講義をリンクさせ、効果的な理解を図った。
28	実習では、なるべく多くの学生の質問に答えられるよう気を配った。
29	微生物学実習書の改善を行なった結果、学生の総合評価が、4.6に上がり、取組みが高く評価された。
30	微生物学実習では、実習内容を説明する冊子の改善を毎年おこなっている。
31	社会医学実習と研究室配属プログラムでは、学生に頻繁に声をかけたり質問したりして自身で考えることを促した。
32	実習のまとめ、ディスカッションに時間を費やし理解を促した
33	実習の参考資料を充実させ課題への興味を促した
34	実習では、実施中に巡視して指導し、終了後にはレポートを点検し指導した。
35	実習に関しては、関連文献等を提供し、データのまとめ方、発表デザインについてこまかく指導した。
36	病棟実習時に国試問題の解説を始めた
37	外来実習ではできるだけ実際の患者さんの所見をみってもらうように努めた。
38	カルテ記載やサマリー作成方法の指導を行った。
39	画像診断を実習に取り入れ視覚的に膠原病リウマチを理解できるように工夫した。
40	医学科5年生病棟臨床実習において呼吸音の正常、異常についての講義、胸部X線読影の講義を行い、呼吸器学の基礎について学生指導した。また、カンファレンスや回診で学生の指導に当たった。
41	毎週月曜日新患外来にて病歴聴取、胸部X線、CT読影の指導を行った。
42	気管支鏡検査前には目的やリスクなどを説明し、理解させてから見学するようにしている。
43	医学科5年生の臨床実習では、ベッドサイドでの直接指導をする時間を多くさいた。
44	臨床実習に関しては、学生担当患者の診察法、カルテ記載法、症例提示に関して個別に指導を行い、脳卒中に関しては学生グループ毎に講義を行った。
45	病棟実習では、可能な限り、実際の患者さんをモデルに診察実演をするようにした。
46	病棟実習において、脳卒中診察（NIHSS）のWEBビデオ上のテストを行い、全員に合格認定証を受け取るようにした。
47	終日1学生をマンツーマンで指導する体制へ変更し、外来及び、入院患者に対する診察、検査、病状説明等スチューデントドクターとして、副主治医の立場で指導を実施した。
48	5年生の臨床実習における心エコーレクチャーは、卒後研修センターにおいて、学生全員にお互いに実際のエコーを使用させ、時間をかけて丁寧に説明するように心がけている。
49	専門外来で、新患患者の間診、診察を行わせ、診断までのプロセスを自分で考えて導き出せるような指導に努めた。
50	ミニレクチャー・手技/外来見学などの循環器臨床実習の枠組み作成を行った。
51	外来実習は単なる見学でなく、1症例のみ立ち合いで自らが診察した気分で診断させる形式とした。
52	臨床実習中でも押さえておきたい腎病理所見の基礎と実臨床での例を提示し理解の助けになるよう取り組んだ。
53	実習中に行う講義に用いるスライドを更新し、より学生が見やすい形とした。
54	臨床実習では様々な症例を経験できるように担当する患者を振り分けた。
55	病棟実習は糖尿病・内分泌の疾患を教えるだけでなく、POSを用いて症候学・鑑別診断を主体に指導した。
56	外来実習の中で問診のととり方、糖尿病の治療についても患者を通して指導した。
57	病棟実習では、糖尿病合併症の知識や各症例に応じた治療目標を学べる講義を行った。
58	外来実習では患者個人に応じた治療目標の設定や治療薬の選択に関して、実際の診療に即して指導を行った。
59	医師国家試験問題の過去問を用いて、現在の実習が国家試験に直結することを提示すると共に、自らが臨床実習に参加する意欲を高めるよう指導している。
60	6年生選択実習学生の海外学会帯同を行った。
61	臨床実習において、各人にレポートを課し、発表会を行なった。
62	病棟実習では、患者の付け替えや診療を通じて、疾患や治療に関して教育を行った。
63	外来実習では、患者との診療を見せながら、外来診療の進め方や疾患治療に関する教育を行った。
64	外来実習は、それぞれの疾患において医師が医学的／社会的などの目線で、何を考えながら診療しているかを説明しながら行った。
65	病棟処置に学生を参加させ手技を指導した。
66	実習では、積極的に手術参加を促し、実際の腹部解剖や手術手技について説明を行った。また、その中で質問を行い、自己学習の課題が持てるように心掛けた。
67	医学科5年生の臨床実習に際し、オリエンテーション、診察の指導、実習評価を行った。
68	研究室実習
69	臨床実習では、実際に糸結びをおこなってもらったり、手術前後の時間に手術用顕微鏡を動かしてもらったり、できるだけ体験することで、難しさや面白さを感じてもらえるようにしている。
70	実習では、臨床参加型実習を行っている。

71	手術実習では、単なる見学ではなく術野モニターを供覧し on time discussionを行っている
72	手術解説に関しては、マンツーマン指導を徹底し、単なる見学にしないよう工夫している
73	外来実習では、標準的治療方針に加えて、実際の患者背景をふまえた治療方針の立て方についても提示した。
74	臨床実習では、実際に学生に検査手技を経験させ結果を検討した。
75	学生の実習などに従事した
76	実習では、各々の担当ケースに照らし合わせながら指導をすることで体験に基づく学習になるように指導すると同時に、精神医療の現場で実習生が傷つくことなく安全に実習に取り組めるように配慮した。
77	マンツーマンで臨床に携わり、常時精神的な関心、興味を持った質問を受け付け、活発な議論を導いた。
78	実習におけるミニレクチャーでは、学生が積極的に参加できるように双方向の講義を心掛けた
79	実習においては、実臨床における患者とのかかわりを重要視し、また国家試験を意識した内容を教えた。
80	病棟では小児ならではの特性に興味をもってもらえる様に検査値の考え方等を解説した
81	臨床実習については、実際に休日夜間診療所に来た患者を例に挙げて指導。
82	実習でも、なるべく学生自身の考え、解釈を引き出したうえで、医師としての考え、解釈を伝えることで、自分で考えさせるようにした。
83	実習においては考察時間を設け、議論が進みやすいような雰囲気を作成
84	ベッドサイド回診を多く行った。
85	家族説明だけでなく、コンサルトや他職種との話し合い、いろいろな場面に連れて行き、退院後の患者の生活に目を向ける大切さについて指導した
86	興味を持って実習に取り組めるように誘導
87	国際認証基準に準拠した、参加型臨床実習への改変作業
88	臨床実習では豚眼を用いた手術実習に関して、5年生全員に実際の手術を体験させた。
89	実習で来た学生には一方的な知識の説明ではなく、症例に関連する重要な知識を質問形式にして説明した。
90	実習中実際眼科検査している様子を見学させて、検査に関連した国家試験の口頭試問を行った。
91	外来診察を中心に、問診の聴取や実際の診察を指導した。
92	学生を積極的に手術助手として参加させた。
93	外来で模型や図表、実際の超音波検査を呈示しながら指導を行った。
94	6年次選択実習において、副鼻腔実態モデル・骨標本・内視鏡を用いて指導を行った。また同実習においてOBが院長であるクリニックでの見学実習を取り入れた。
95	病棟医長であったため、学生が手術助手として参加出来る手術には積極的に参加させた。
96	学生の勉強になるよう、出来るだけ典型的な症例の担当が出来るよう心掛けた。
97	術前サマリーは学生自ら情報収集して作成し、画像を供覧して指導しカルテ修正、発表の場を設けた。
98	選択実習においては、触れることの少ない口腔外科臨床を見てもらい、口腔内の病態の特徴、所見の取り方等を学んでもらった
99	臨床実習では医学科学生が歯科口腔外科領域の病態や治療法の特徴について理解できるよう資料を作成して説明を行った。
100	外来手術ではアシスタントへとして積極的に手術に参加してもらい、術後にフィードバックを行った。
101	より良い学生教育のためのカンファランス。チーフレゼンダントとしての学生指導の工夫。
102	実習の指導は講義スライドを新しいものに作り替え使用した。できるだけ多くの学生と長い時間接するように努め、個々の学生の到達度に合わせた指導を行った。統括試験用の画像問題は新しいものに変更した。
103	病棟実習での講義に国試の問題も取り入れている
104	実習中の放射線検査時の患者説明に立ち合わせ、手技をなるべく行わせている
105	実習では、積極的に学生に話しかけ教育した。
106	実習時のレクチャーにおいても、正常像を深く理解することを主眼に、病変の発見につながるアドバイスをを行うよう努めた。
107	臨床実習では、PBL形式授業とReverse CPCを行っている。
108	知識習得のチェックとしてe-learning用テスト形式を実施。
109	輸血学については教育用DVDを用いて実習を行っている。
110	実習内の講義であるため、実習中の感想などを聞くことから講義をはじめ、一方的にならないように講義している。また、できる限り、自分の言葉で考えが発言できるように一人一人に問いかけ発言を求めるようにしている。資料については最新の情報を加え作成した。
111	学生実習における振り返りの工夫
112	実習では、新たな福祉機器を増やし、説明文書と解説方法を改善した。
113	臨床実習後OSCE成績不振者にOSCEおよび医師国家試験準備の指導を行った。
114	医療面接実習では、模擬患者団体に協力してもらい実践的な実習を実施した。
115	海外臨床実習に参加する学生には事前オリエンテーションで現地の安全情報や危機管理について説明した。

116	臨地実習において、実習指導者との教育内容についての事前打ち合わせ、および学生個々の指導についての話し合いを持ち実習が効果的に行われるよう調整を行った。
117	臨地実習指導において、学生の日々の学習状況を確認しながら、個別指導を行った。
118	実習においては、昨年度の課題を踏まえ、実習前から学生の学習状況を確認し、課題を明確にして臨んだ。実習中は、毎日記録物を確認しコメントを記載し、学生が次の日に修正して実習に臨めるようにした。必要時は、時間外に指導時間を設け、個別指導を行った。また、実習中の技術の経験を期限を決めて確認し、実習指導者と調整しできるだけ学生が経験できるようにした。カンファレンスでは、学生だけでなく、実習指導者とも内容の調整し、学びの多いカンファレンスになるようにした。
119	臨地実習期間以外にも実習環境整備に取り組み、学生の臨地実習が円滑に行えるよう配慮した。
120	精神看護学実習では、実習開始前に学生へのオリエンテーションやガイダンス、体調・物品管理表の作成、看護部及び実習指導者と事前に打ち合わせや確認を行いながら必要物品を整備し、学生が円滑に実習が行えるように取り組んだ。
121	実習においては、具体的な指導ができるよう個別に指導する時間を必ず設けた。
122	成人看護実習では、クリティカル領域の実習を急性期実習の中に組み込み調整を行った。
123	臨地実習では、患者選定を実習前に行い、実習前週に学生がアクティブラーニングに取り組めるように変更した。
124	実習では、学生の思考過程と看護技術のスキル向上のため、臨床実習指導者との調整を行った。
125	実習効果の改善のため、実習のスケジュールや実習の場などの変更を行い、病棟との調整を行なった。
126	実習においては、実習の進行状況と学生個々の能力・学習準備状況を考慮し、個別的な対応・指導が行えるよう努めた。
127	実習中の学生の学習や体調管理に関して包括的なフォローができるよう、必要時はチューターや病棟スタッフ、保健管理センターと連携し関わった。
128	統合実習では、学生が考えている課題を解決できるようにするために学習会を設けた。
129	成人看護学実習では、学生の体験をもとに、看護の意味付けができるように発問するよう心掛けた。
130	新カリキュラムで老年看護学実習時間数の増加に伴い、新たな地域交流企画実習を取り入れ、学生から高評価を得た。
131	今年度から老年看護実習の単位数が増えたため、地域交流実習を企画・実施し、地域における高齢者ケアに関する学びを促進できるよう工夫した。地域住民からもよい評価を得た。
132	老年看護学実習では、新規実習場所との調整を行い、より学習効果を高められるよう臨地実習指導者との連携を図った。実習スケジュールの変更に伴い、実習での実践力を高めるために初日オリエンテーションに演習を取り入れた。
133	老年看護学実習ⅠⅡにおいて、スムーズに実習が行えるよう臨地実習指導者およびスタッフと相談をしながら調整を図った。全員が実習目標を到達できるよう、個人およびグループに指導を行った。
134	母性看護学実習では、産前・産後ケア実習施設を開拓し、学習効果を挙げ、テレビでも紹介された。
135	鍋島公民館の協力を得て、母乳育児支援の実際の教育を行うことができた。
136	アイカメラを導入した分娩介助の教育を行った。
137	産前・産後ケアや鍋島公民館での学習機会を通して、母子についての現状や課題を具体的に考えることができた。
138	母性看護学実習では、できるだけ沐浴できる機会をつくり、人形と新生児の違いによる注意点などを考えることができた。
139	母性看護実習では、学生が母性看護の実際を知る機会を増やすために、助産師が患者に指導している場面に学生も同席させてもらったり、担当患者以外の新生児の沐浴も実施させてもらえるよう病棟助産師に依頼した。
140	小児看護実習では健康な子どもを理解するために保育所実習を1日夏休み期間に実施した。夏休みに行う理由として、附属病院の子どもセンターの実習対象と子ども達が易感染状態であることから保育園実習で感染症の媒体とならないように配慮したためである。
141	保育所と病棟実習では、発達理論を用いてアセスメントする経験ができたことで、よりアセスメントが深まり、机上で得た知識と実践が結び付いた場面が多く見られた。
142	実習で受け持つ患児の日数に応じて計画や実践する日の調整を実施した。このことにより、早期よりケア介入できたため、次年度も実習先の情報収集をしながら調整していきたい。次年度は、アクティブラーニングの方法をより少人数で具体化して実践していきたいと考える。
143	学生が公衆衛生看護学実習Ⅱに取り組みやすいように事前オリエンテーションを丁寧に行った。学生から、わかりやすかったと評価を受けた。
144	公衆衛生看護学実習Ⅱがスムーズに進行できるように、実習施設の調整を丁寧に行い、学生や実習施設からも実習がしやすかったと評価を受けた。
145	麻酔シュミレーターや、薬物血中濃度シュミレーターなどを活用した
146	集中治療部における学生実習について、医療機器のモデルや実機などを活用した
147	実習では実際の症例のCT、MRI画像を用いて、正常画像解剖、異常所見、レポート作成のポイントをわかりやすく解説した。
148	実習では参加型移行を主導し、学生に回診で直接指導する形式を継続した。
149	学生実習では問診に対して、足りなかった内容、鑑別疾患の想起などを意識して指導した。
150	患者への身体診察を積極的にさせるようにした。また、手技もさせるようにした。

151	実習においては、医学的な知識の習得はもちろんのこと、習得した医学知識をいかに臨床に生かすかを伝えるかを意識した。
152	例えば外来診療においては自分の思考過程を状況に応じて、そして失敗例なども提示し、具体的に説明した。
153	実習では病棟入院の患者の回診を毎日行い、その患者に関する医学的知識その他鑑別として必要な知識を質問し教育していく。
154	実習についてはICUで医学生や看護学生の指導にあたり、難しい病態を分かりやすく説明するように努めた。また学生からの質問にも、資料を見せながら、理解できるまで、丁寧に説明した。
155	6年生の病理部実習では、医療安全の講義や病理診断実習など、卒後の臨床研修で役立つ内容を盛り込んだ。
156	病理学、UNITの実習には、学生からの質問に熱意をもって対応した。
157	内視鏡室実習では、検査中の解説の更なる理解のために検査後に画像を示しながら再度説明を加えた。
158	臨床実習においては常に学生に質問をし、学生の理解度を確認し、最終評価の基準にもしている。
159	患者の背景に配慮し、内視鏡検査・治療は事前に概要を説明してから行い、学生の理解に協力した。
160	6年次感染症実習において感染症や抗菌薬、感染対策に関する基礎的講義を行うとともに、診療を通じた臨床現場で活用可能な知識獲得を目標としている。
161	臨床実習では診療の流れを経験するとどまらず、患者の症候やプロブレムに対して自分なりの意見を持たせ、プレゼンテーションさせるようにした。
162	抗菌薬の意思決定も求め、妥当なものに関しては意見を尊重して臨床での実践に取り入れる様にした。自分の意思決定が反映されることで、後日の経過観察も積極的に行う様子がうかがえた。
163	2019年度からの新臨床実習カリキュラムの作成
164	臨床病棟実習では、多くの臨床所見を見学し、学生が体験できるように配慮した
165	臨床外来実習では、個々の外来症例ごとに、症例のフィードバックを行った

【PBL・TBL】

1	PBLでは、学生が積極的に討論出来るように裏方として場の雰囲気をよくするために積極的に話しかけた。
2	PBLチューターに関しては、奨励の内容にとどまらず、物の考え方などを伝えるようにしており、アンケートを見る限り高い評価を得ている。
3	PBLに関しては、学生が形式的にこなそうとするのを改善するように、都度横槍を入れるよう心がけた。
4	PBLでは、これまでの経験を基にして説明や質問の回数を増やした。
5	PBLにおいては、質疑応答に積極的に取り組むよう指導した。
6	PBLにおいては、患者の立場、医療者の立場をより実践的な立場から慮るよう働きかけた。
7	課題に応えることがどういうことなのか、知る面白さや難しさを認識させた。
8	PBLでは、学生が発表しやすいように気を配り、特にプレゼンテーションの際に、それぞれの学生が興味を持った事項を他の学生にも伝えるように指導した。
9	PBLの学習効率を高めるため、PBLセッションのクエスチョンの可視化を、徹底させた。
10	発表では、質疑応答の議論を必須として、必ず質問が出るように、指導と補足をした。
11	発表の内容とプレゼンテーションの技法について、学生それぞれに一人ずつ指導をした。
12	PBLでは学生間の議論が何となく終わってしまうのを防ぐため、解剖学・生理学の復習事項やCBT・国試で問われる重要事項に関して必ず学生に質問し考えさせ、納得して次のステップへ進めるよう配慮した。
13	PBLでは、学生全員が討論に参加するように促し、討論が活発に行えるようにした。
14	PBLでは質問やコメント、フィードバックを積極的に行い、また独自に補足資料（ガイドライン等）を学生に配布し、議論の活性化や学習意欲の向上を図った。
15	PBLチューターとしては、議論を円滑に進行できるよう、質問や適切な助言をした。
16	PBLチューターとしては、議論を円滑に進行できるよう、サポートした。
17	PBLチューターでは、実際の学会発表などのやり方を指導した。
18	PBLでは、科学的な疑問点を指摘することで、科学としての医学を実践させた。
19	PBLでは、なるべく全員が発言できるよう配慮した。
20	PBLでは社会医学関連のシナリオ改訂に助力し、特に疫学研究の実際と統計解析について理解が深まる様に配慮した。
21	社会学の疫学のPBLのシナリオを前年度分から改良することで、学生が疫学の方法論を理解しやすいように工夫した。
22	PBLでは、学生が発言しやすいように和やかな雰囲気づくりに努めた。
23	PBLシナリオを改訂した
24	PBLチューターとして、学生が発言しやすい雰囲気づくり、適切な疑問の投げかけなどに取り組んだ
25	PBLシナリオは四年目となり、小さな改訂を加え、総講義では検案書の書き方についても言及した。
26	PBLは班によって議論への積極性が異なるので、介入の仕方を毎回変えた。
27	TBLの教育資料の改訂を行った。試験問題、成績について解析を行い、担当教官に解析資料を配布した。

28	TBLでは事前に講義を行い学生のディスカッションの基本となるように工夫し、TBL後の講義で質問事項について解説を行い理解を深めることができるように工夫した。
29	PBLチューター（2日目）では、メンバーの発表に対して必ず一人一問質問をさせるように努めた。
30	PBLでは単一の病態でよいのか、複数の病態が重なっているのかなど考えた上で鑑別を上げていくように指導した。
31	CBL講義では臨床に即した内容や最新のデータによる講義を行った。
32	PBLチューター時にミニレクチャーを加えた。
33	自発的な疑問や取組を促すことが重要であると考えて、①尋ねる②教える③やってもらうの順を心掛けている。疑問を尋ねる機会を設け、主体的な学びにつながるように努力している。
34	CBLのシナリオは常に改変して新鮮さを維持した。
35	PBLでは、学生発表に対する補足を適宜行った。
36	今年度からCBLに変更となり、集中的に診断学を症例を通して教え、学生の自己学習能力を引き出した。
37	PBLでは、理解が深まるよう適時介入した。
38	CBLでは、グループでの討議を促進するような症例作成を心掛けた。
39	CBLにおいて、皮膚の構造を書かせるなど、指導方法を工夫した。
40	ユニット7のCBLでは実際の診療の流れに沿って症例を提示し、皮膚および病理所見の見方、鑑別、検査方法、治療選択について討論した。
41	PBLでは、前年同様に、学生の討論に積極的に介入し、症例の検討の方向性を正しく誘導できるように心掛けた。また、症例に合わせた実臨床の場での経験を紹介し、検討している症例をイメージしやすいように努めた。
42	CBLで実際の診療に基づく症例提示を行い、学生に実際の診療に近い考え方を教えた。
43	PBLチューターや実習では、答えそのものではなく、そこにたどりつく医学的思考回路を重視して指導した。
44	PBL教育において学生が話しやすい雰囲気づくりと質疑応答に的確にこたえられるように十分な予習をする
45	PBLチューターに関しては、グループ・メンタリティを尊重することで自主的に課題に取り組めるように配慮した。
46	PBLチューターにおいては、国家試験において必要な内容をまとめて、学生にお渡しした。
47	PBLチューターでは学生の議論を引き出す様に声掛けや問いかけを心掛けた
48	PBL講義は学生が興味を持てるように、臨床に即した内容となるように工夫した。
49	PBLでは、疑問点として挙げた事柄を、臨床的にどのように重要かを説明して、ふたたび議論させた。
50	PBLチューターでは、自分の学生時代や研修医の時に失敗点や、ピットフォールを多く示すことで、学生主導の議論を起こすよう配慮した。
51	PBLにおける学習要項作成、シナリオ作成
52	PBLにおいて学生の自主的な意見交換と自己学習を支援した。
53	PBLにおいては、シナリオに沿って実臨床を想定した質問をなげかけた。また、患者や家族からの素朴な疑問を投げかけ、Learning issueのテーマを引き出した
54	PBLではチューターとして意欲的に学生が意見を出せる様な環境作りに努めた。また、自分の臨床経験を踏まえ、疑問に思った事など、例に挙げながら、積極的に学生のディスカッションの中に問いかけるようにした。
55	TBLにおいてモニターやDVDをデモンストレーションして臨床教育の動機づけを工夫した。
56	PhaseIII検討部会、unit2コチエアー、シナリオ作成、問題作成に参加しPBL教育の改善に当初から取り組んでいる。
57	PBLシナリオに画像を取り入れ、画像読影実習をおこない4.7という高い評価を得ている
58	PBLでは、極力介入するように努め、積極的な意見の交換を促した。参考資料の作成・提示も行った。
59	PBLでは学生が主体的に取り組めるように意見を促した。
60	PBLでは学生の主体性にまかせて要点だけを指導するように心がけた
61	TBL授業の工夫
62	PBLでは、指導書の着眼点を予習し、伝達すべき要点を端的に伝達するように努めた。
63	PBLチューター時に、担当するテーマに関して自らもプレゼンを行い、議論に参加した
64	PhaseⅢチエアマンとして検討部会を定期的に開催し、PBLの問題点の把握と解決につとめた。
65	PhaseⅢでのCBL運営のため、ガイドを作成し教材作成を支援した。
66	PhaseⅢの各Unit中にCBTを取り組むことで予習・復習の機会をもうけるようにした。
67	特にPBLでは学生が項目の一つ一つを学ぶことに集中しがちであるため、ある時点で一人の症例として話し合った内容などをまとめて総括的な見方ができるような誘導を心がけた。
68	PBLチューターとしては学生達が自ら発言しやすい雰囲気作りに努め、臨床でも役立つ内容も付け加え、興味を持てるように配慮した。
69	PBLチューターでは、学生の学習に積極的に介入するようにした。
70	PBLでは設問に対して適切な問題解決ができるよう学生実習に祭して適切に指導するよう務めた。
71	PBLチューター時の指導は臨床現場の症例に照らし合わせ、より実践的に指導を行っている。

72	PBLチューターに際しては学生の討論・考察を引き出すために必要と思われる介入を積極的に行っている
73	PhaseⅢ検討部会世話人
74	PBLにて学生が発言しやすいような雰囲気づくりを行った

【その他・個別指導・マネージメント等】

1	医学科生、看護学科生4年生が選んだ教員ベスト10(医学教育分野)で1位に選ばれた。
2	社会医学実習で調査研究を行った学生が、医学教育学会でポスター発表をすることになり、抄録やポスター作製、発表指導などを行った。
3	チューターとして、時間外でも相談に乗り、学生からの発言が聞きやすい様な環境で話し合った。
4	学生から試験の解答の質問に対して、メールや教授室でわかりやすく説明した。
5	留年生に特別に面談指導した。
6	外来診療時間の他に、個別に、朝、夕対面指導を実施した。
7	ティーチングポートフォリオ作成ワークショップに参加し、自身の教育理念の再確認や他の教員の工夫など学んだ
8	学会への参加を年間3人、また国際共同研究ミーティングへの参加を3-6か月に一回の頻度で参加させる。
9	学生がなぜ佐賀大学での研修を希望しないか?という問いかけを行い、指導へのフィードバックとしている。
10	各ワークショップに参加し他教員の指導方針や教育方法に触れ、自身の教育方針にフィードバックできるよう心掛けている。
11	医学英語検定試験受験を推奨し、3級、4級合格を果たし学生がいる(Certificateを確認)
12	PhaseⅢの成績不振者に学習別面談、指導、補習を行った。
13	担当科目の教科主任として、学習要項作成、実習連絡会議資料、評価資料等を作成し教員ならびに実習指導者の調整を行った。学生には、個別指導を丁寧に行い、意欲的に学習に心掛けた。
14	新しく担当した授業内容に関する学外研修に参加し、教育内容の整理を行った。
15	チューターの指導では、国家試験や就職活動を中心にかかわった。それぞれ、学生の進捗状況を確認し、万全の態勢で臨めるよう心掛けた。
16	危機管理能力に優れた実践的な国際看護領域で活躍する人材育成プログラムの開発研究が、科研費の基盤研究に採択され、SINCHI式教育モデルを開発して、アジア太平洋災害医学会等で発表するとともに、国際看護の教育現場でも実践している。Simulation, Integration, Nursing skill, Communication, Humanity, Infection Controlを統合したシミュレーション教育である。
17	平成30年度には、「教育内容が良かった」という理由で、学生の選ぶ優れた教員ベストテンで第1位であった。
18	講義内容に触発された個別の求めに応じて面接を行なった。
19	合計2回の医学部生に対するキャリアセミナーを開催した。